



信州安曇踊 安曇節歌詞 目次

歌詞凡例

特殊の場合に限り用ゆる歌詞/1

踊の場所柄に應じ音頭取が用意すべき歌詞配列の數例

其一 宮城の花見に/10

其二 白馬山頂に/21

其三 白船温泉に/33

其四 同窓會餘興/45

其五 歌の取合せ/58

安曇節歌詞部門別/

一 山岳 (山岳、登山、高原、スキー、キャンプ) /70

二 河川 (河川、溪谷、瀧、湖沼、温泉) /107

三 交通 (地理、交通、坂及び峠) /147

四 名所 (名勝、名木、名石、史蹟) /225

五 名産 (水電、有明やま、穂高わさび、青木花見の鯉、松川みかげ石、名物いろゝゝ

275

六 敬神 (神社、寺院、祭禮、信仰) /330

七 歴史 (民間傳説、史實及び人物) /376

八 風習 (風俗、慣習) /417

九 老若 (禿げ頭、娘、嫁) /454

十 人情 (人情、世態、諷刺、戀愛、別離、厭世、悟道、樂天、祝賀) /493

十一 生活 (貧乏、職業、修身、齊家、興世) /629

十二 時候 (春、夏、秋、冬) /671

十三 農作 (苗代、花田、借馬、馬耕、晝休み、代田植、農休み、あと田 田の水、田の

草、野菜、蠶、烟草、草刈り、土方、案山子、收穫、山仕事、炭焼き、藁細工、雜) /800

十四 天象 (日、月、星、夜) /911

十五 氣象 (雲、霞、霧、虹、雨、露、霜、雪、木花、氷、風) /937

十六 花 (梅、櫻、辛夷、桃、菜の花、蒲公英、躑躅、石南花、藤、茨、牽牛花、種々の

花、月見草、桔梗、蕎麥の花、紅葉) /972

十七 木石 (草木、岩石) /1026

十八 動物 (雉、鶯、雲雀、燕、杜鵑、行々子、水鶏、鷺、梟、日雀、鴉、獸類、蛙、尺

蠖、蟬、螢、機織り虫、きりぎりす、鈴虫(魚類) /1036

十九 野遊び (草摘み、花見、蕨、獨活、筍、岩魚、きのこ、こんまら、鈴虫捕り) /1092

二十 踊 (踊り場、踊り始め、踊らぬ人、飛び入り、踊の姿、音頭取唄、月明、踊半ば、

踊さびれる、踊仕舞ひ) /1121

凡例 ◎印 安曇古来の盆踊り唄をそのまま

◎印 古い歌の一部を改作

○印 安曇節新興により生まれた歌詞

▲ 特殊な場合に限り用ゆる歌詞 1/9

- 寄れや寄って来い安曇の踊り、田から畑から野山から
- 槍と白馬あの峯續き、踊りや続けや輪の形(なり)に
- 安曇踊りと三日月様は、私大次第に丸くなる
- ◎音頭取りましょう仰せとあらば、西の山まで響くほど
- 君が齢は千輪菊の、花に蕾の数添えて
- 守り給えや神代の昔、岩戸開いた踊り神
- ◎心引き締めきりりと踊れ、踊り神様見て御座る
- 踊り續いて皆くたびれた、少し休んで又は踊れ
- 息災(マメ)で逢いましょ又くる年の、踊る輪の中月の夜に

▲ 踊りの場所柄に応じ音頭頭が用意すべき
歌詞配列の数例

其一 宮城の花見に 10/14

- 七重八重引く安曇の霞、奥の一重は山桜
- 花見什箱重そに提げて、轉ぶまいぞえ隠れ鼻
- 転び落ちそな岩抱き止めて、藤の花咲く隠れ鼻
- 岩に籠りしギボシでさえも、踊り見せれば出てござる
- 今も昔の血潮に燃ゆる、ギシキ岩屋の鬼つつじ

15/18

- 娘十四五花なら蕾、咲くな咲いたりや散るばかり
- ◎わたしゃ奥山谷間の桜、人に知られず咲いて散る
- 安曇山家で咲いたろ桜、京の人まで迷わせる
- 花はらんまん毎年咲くが、人の盛りは五六年

19/20

- 桜散る散るあの子が踊りや、踊る手に散る肩に散る
- 瓢(ふくべ)忘れて後振り返りや、禿げた頭に花が散る

其二 白馬山頂にて 21/26

- 日本アルプスどの山見ても、冬の姿で夏となる
- 白馬七月残りの雪の、間に咲きだす花の数
白馬八月残りの雪を、割りて咲きだす花の数
- 花に焦がれて白馬のぼり、残る白雪踏みわける
- 結ぶ縁は幾山越して、蝶が尋ねる岳の花
- ◎岳の岩間に咲く花さえも、夜は白露抱いて寝る

27/32

- ゆうべ四谷で今日白馬で、明日は杓子や鏈ヶ岳

- 黒部越え来て白馬泊まり、明日は四谷で盆踊り
- 踊る四ヶ庄の馬方娘、着莫蔭脱がずに草鞋ばき
- 日本アルプスあの強力は、背中一つが飯の種
- 来るよお嬢さんが膝小僧出して、はかせやりたや雪袴
- 主をたよりにわしゃ北安曇、ともにはきます雪袴

其三 白船温泉にて (白骨温泉) 33/41

- 雪の乗鞍まともに仰ぐ、夏は涼しい番所
- 一度ござれよ番所原へ、夏のさ中に布子着て
- ◎住めば都で山また山の、奥に花咲く蕎麦畑
- 碓の目なりのだんだら畑、蕎麦の花咲く大野川
- ◎大野川衆は一目で知れる、麻の小袋腰に下げ
- ◎右は白船左は野麦、此処は奈川渡 (なかほど) 袋谷
- ござれ紅葉の色づく頃は、お湯を尋ねて白骨へ
- 檜峠を往来の人は皆白骨湯のお客
- 浮世しら骨よいとこなれど、雨の降る日は気が沈む

42/44

- 燃ゆる思いはアルプス山の、烟絶えせぬ焼ケ岳
- 烟絶えせぬ焼岳よりも、焦がれ焦がるるわが思い
- わしの思いにくらべて見れば、薄い煙の焼ケ岳

其四 同窓会 (青年会、處女会) 余興 45/50

- 里で菜種の花咲く頃は、雪に浮き出す蝶ケ岳
- 蝶や燕、爺、代馬と、五月解け出す岳の雪
- ◎聞いて恐ろし見て美しや、五月の二作鬼つつじ
- 春は暮れてもまだ咲き残る、わたしゃアルプス遅櫻
- 安曇山々気高い姿、雪の冠雲の帯
- 土用の半ばにあの爺ケ岳、雪の頭巾がまだ脱げぬ

51/53

- 槍で別れた梓と高瀬、めぐり逢うのが押野崎
- 水は押野へ皆落ちて行く、安曇 15 里出穂 (しゅつすい) にして
- 揺れる穂波に案山子が泳ぐ、安曇野を吹く秋の風

54/57

- 山は時雨かあの炭焼きの、烟が這うぞえたよたよと
- 吠 (かます) 背負い出す炭焼きさえも、揃ろや見事な山下り
- さても三百六十五日、切れたる筈だよ雪袴
- 切れりゃ又續ぎ續ぎゃ又切れる、苦勞盡きせぬ膝の續片 (つぎ)

其五 歌の取合せ

第一例 風流月並 58/63

- 袖正月門松要らぬ、前の松の木注連 (しめ) 懸ける
- 二月末まで藁細工したが、花の三月あ畑打つ
- 石の間 (あいま) へ子をスリシコル、花の三月陸鰻 (おかかじか)

- 穂高豊科梅咲く四月、此処は大町雪が降る
- 五月馬市算盤要らぬ、袖と袖とで値が決まる
- 安曇六月まだ風寒い、田植布子に雪袴

第二例 「よりも」 盡し

64/69

- ◎恋に焦がれて泣く蟬よりも、泣かぬ螢が身を焦がす
- ◎松川蕎麦より何より彼より、速く添いたや主のそば
- ペコンペコンと三味ひくよりも、わたしゃゴロゴロひきゃ（靱摺り）ひく
- ◎息災でいるかの言づけよりも、切れた紙幣（さつ）でもよこしゃ好い
- よその土蔵くら眺めるよりも、うちへ帰りて蕎叩け
- しらぬ商いするより勝した、資本（もとで）要らずの藁細工

▲ 安曇節歌詞部門別

一、山 岳

70/80

- 雪のアルプス春日にやけて、黒い顔出す鍋かむり（鍋冠山：南安烏川村）
- 花の霞の三尺帯を、締めて種まく爺ヶ岳
- 帯に締めたるあの春がすみ、爺が岳には派手過ぎる
- 鹿の子まだらのあの白雪を、あやと織り出す岳の花
- 白馬登れば越路は一目、海に浮かんだ佐渡ヶ島
- 槍や穂高は霞んで見えぬ、見えぬあたりが槍穂高
- 雲の上越すあの槍ヶ岳、飛驒と信濃は西東
- 晴れた日でさえ白雲かかる、神のまします穂高岳
- 雪の白幣神代のままの、姿崩さぬ穂高岳
- 又も焼岳やけ出しなさる、一度呉れたや虫菓
- 春は裾から花咲く山も、秋は峰から紅葉する

登 山

81/85

- 谷にノツシリと白雪ア残る、登山嬉しや五六月
- 登る常念豊科口の、一の沢邊は夏桜
- 小屋を目あてに尾根とぼとぼと、はかは行かない岳の道
- 四ッ谷出る時やパラパラ雨で、白馬尻から晴れわたる
- お花畑で皆踏み迷う、どこを踏んでも花ばかり

86/91

- 山はアルプス宮様方も、雪を褥に岩枕
- 雲の上行くアルプス銀座、喜作新道は尾根伝い
- 徳本峠でチョット冷麦の、箸で指さす穂高岳
- 山へ山へと焦がれて登る、東男や京小町
- 登り降りてひと夏暮らす、雪の穂高見（古代名称）峯傳い
- 夏の登山者又冬ござれ、冬はスキーを背負てござれ

高 原

92/98

- 安曇野の末霧に浮かぶ、牛の背のよな山の数
- 淋し原だよ赤芝原は、柳やほほけて飛ぶばかり
- 狐こんこん鳴いたクマンド原で、今日も兵隊さんがポポンパチパチ豆を炒る

- 話を聞いたら蚊帳売り逃げた、虻も蚊も居ぬ番所
- 神戸原にて鈴虫捕りの、かざす松明ア五里見ゆる
- 神戸原行きや芝団栗が、秋の西日に頬冠り
- 爺が萱刈る枯野の果ては、お日の入らしやる山の裾

99/102

- 日本アルプス スキーで越して、下る所は飛騨の国
 - 此所は番所スキーの名所、雪の素肌のきめの好き
 - 雪を冠りて寝て居る笹を、来てはスキーで揺り起こす
 - 雪のお平はスキーに暮れて、里に夕餉の灯がともる
- キャンプ

103/106

- 塵のうき世の苦は白樺の、木陰涼しやキャンピング
- お花畑の雫を汲んで、お米とぎますキャンピング
- お月や照るてる白樺林、キャンプ出てきて皆踊れ
- 京の小町のキャンプの夢を、のぞく深山のあのお月さま

二 河 川

河川

107/114

- 奥は春雨雪解けもよう、桂高瀬の水が増す
- 日本アルプス落ち来る水は、淵で踊りて瀬で囃す
- 水の流れに散る花浮かべ、花のたよりを越後まで
- 山と海との縁を繋ぐ、水は儂い方だより
- やさし美し名も姫川の、もとは白馬の花の露
- 里へ出たさにあの笹原を、わけて落ち来る葦間川（馬羅尾谷から出る川）
- 乳川渡らば橋を架け渡れ、夏の土用でも足や切れる
- 餓鬼の乳岩落ち来る水に、早魃知らずの田が並ぶ

溪 谷

115/118

- 雪の中から芽を出す露坊、五月取り行く清水谷（馬羅尾谷の奥）
- 五月谷間の雪むら消えて、露が芽を出す高瀬入り
- うき世離れた高瀬の入りよ、湯俣芽水（みずまた）葛の温泉（おゆ）
- 夜明け遅さよ日暮れの速さ、雨の降る日の高瀬入り

119/122

- 須砂度上れば烏川谷よ、涼し山風さわさわと
- 槍を下れば梓の谷に、宮居涼しき上高地
- 谷の紅葉夕日に映えて、水も染まるよ梓川
- うき世離れた黒部の谷の、奥で日ねもす岩魚釣り

瀧

123/131

- 末を松尾の雄丸の瀧と、深い中谷の雌丸瀧
- めまる瀧だよ髭剃り瀧は、のぞく滝壺目がまはる（小谷温泉）
- 瀧の白糸若葉に染まる、色も青具の峠みち
- 八坂出て来る金熊川も、岩に堰せかれりや夫婦瀧
- 清音（きよと）涼しや森蔭暗く、袖が濡れます瀧しぶき（大町の東）

○八十餘尺のあの水烟、音も高瀬の不動瀧
 ○銚子口行きや青葉を縫うて、落ちる大水澤どうの瀧 (鳥川の奥)
 ○晴れた日でさえ常念瀧の、岸の石楠花濡れて咲く
 ○三十三尋の彌助ヶ瀧も、秋は落葉に埋もれる (中房温泉道)
 湖 沼 _____ 132/135

○青木中綱木崎で湧いた、赤魚はね出す農具川
 ○夏も涼しや木崎湖行けば、岳の白雪舟で越す
 ○小谷山奥きこりに聞けば、名さえ鎌池鉦の池
 ○うつす鏡は大正池よ、雪の化粧の穂高岳

温 泉 _____ 136/146

○八十八夜の雪解け待ちて、のぼる中房お湯開き
 ○谷間たにまの石楠花つつじ、登る中房科野坂
 ○此處は中房お湯から見れば、八重の青山窓のうち
 ○配る笹飯わらびののしを、添えて中房湯のみやげ
 ○夏の中房宮様御座れ、冬は吹雪が戸を叩く
 ○天気かわるか牧山越して、来るよ中房湯のかおり
 ◎主さ行くかえわしをも連れて、五月あがりに葛の湯へ
 ○烏帽子下れば葛の湯どまり、浮世離れの高瀬入り
 ○信州白船お湯から上がりゃ、夏の土用でもどてら着る
 ○中谷川奥小谷のお湯が、せめて在りやよい川尻に
 ○此處は蒲原湯の元問えば、姫川川原の砂の中

三 交 通

地 理 _____ 147/160

○一丈二丈有る小谷の雪も、春は解け行く姫川へ
 ○池田たんぼの雪解け見れば、群れ鳥が螺を掘る
 ○奉公するなら押野がよかろ、山を屏風の日向ごて
 ○山を背にして押野は名所、梅の早いが安曇一
 ○俺等も行きたや田澤へ聳に、日の出知らずに朝寝する
 ○里は春来て鶯鳴くに、小室、中塔は雪に泣く
 ◎何か思案の有明山に、小首かしげて出たわらび
 ○青む冠着 (かむきぎ) 霞める四阿 (あずま)、清き流れの坂井川
 ○鼠穴見りゃ絵のよなけしき、山を屏風に梅桜
 ○岳の屏風に青田の豊、安曇平は千豊敷
 ○たんぼ田の中涼しいけれど、夜は蚊攻めで泣かされる
 ○昔や狐の出た御殿場も、今じゃ青田で蛍飛ぶ
 ○池田大町もとより都、次の都は緑町
 ○たんぼ (鳥川村字下堀) 好いところ豊科ざかい、三味や太鼓を寝しな聞く

_____ 161/169

○八坂、廣津は大麥小麦、大豆小豆や桑畑

- 八坂大字、大塚中に、西は切久保、大平
- 舟場、野平犀川のほとり、北に離れた左右の里
- 松川板取細野に神戸、神戸原越や鼠穴
- ◎此處は住吉、温（ゆたか）な村よ、末を長尾に暮したい
- ◎穂高、等々力、白金、矢原、續く村々仲の好き
- 高瀬入りなら山また山よ、平村とはなぜ云うた
- 平村とは誰が云うた、木崎出ぬけりゃ山ばかり
- 扇町とは誰が云うた、町の事ア措け只の村

170/179

- ◎米の飯を見て腰抜かしたと、小室中塔は山の中
- 中塔娘の寝言を聞けば、嫁に行きたや田どころへ
- 禿げた名題は大澤寺山、安曇平を一照らし
- わたしや光の白牧生まれ、安曇平を見て暮らす（東筑上川手村字光の城山の上の部落）
- ◎塚田山から中村見れば、柿に夕日が赤々と
- 白馬蔵にたてがみ振るい、駒はいなく親の原
- 四ヶ庄馬どこ馬喰さ行けば、蕎麦や煮かけで持てはやす
- 夏は牧場のお平の原（烏川村）も、秋は尾花が月を招く
- 俺等が安曇は素晴らし所、槍も白馬も庭續き
- 何處と聞かれて安曇と云えば、安曇踊を所望され

交 通

180/189

- 安曇筑摩の隔てを結ぶ、いきな橋だよ陸橋
- 小谷街道の雪解け見れば、屋根に上がりし馬の沓
- 春の雪解け登波離を通りゃ、路は赤粘すべり路
- 潮澤奥まだ家あるか、谷の彼方に鶏の声
- かはいそうだよ藪鶯が、鹿島源汲の奥で啼く
- 藪の中だによくこそ御座れ、お手が切れつら萱の葉で
- ◎いやな山家だ朝日がささぬ、鶏の鳴く聲ヨ聞くばかり
- ◎山家ゝゝと里衆はおしゃる、里も其の先きや山續き
- 梅を唇の橋場の奥も、今はラジオで世間並み
- 橋場入りから出てくる炭の、もとは奈川の山桜

190/193

- はやく種播き済まして置いて、花の安曇野一めぐり
- 破れ菅笠下掘を通り、歌に詠まれた其の笠を
- 野澤通りて角影、立田、越せば上野のお庚申
- 川の彼方は森口、三溝、舟に掉さず渡守

194/195

- 穂高明神、豊科蓺者、中の柏矢町玄蕃様
- トヽン豊科太鼓や鼓、續く下堀藁きぬた

196/201

- 西は高瀬で東は山で、心細さよ社村

- 君を見染て會染來たに、七貴なんせとは情無い
- 安曇、筑摩が手に手を取りて、進む文化の木戸の橋
- 夜さり通れば睦の橋は、安曇踊で通れない
- 野暮な自動軍通して置いて、又も踊の睦橋
- 高瀬がつたら橋ア手に手を取りて、渡る娘も命がけ

202/209

- 千国街道は山の腰を通る、安曇を一目に見て通る
- 千国街道は野道となりて、心細さよ糸すゝき
- お日は短し安曇野長し、わるべ泣かせにさす夕日
- おらも成りたや鉢伏山に、諏訪と安曇を見て暮らす
- 高瀬入りから時雨に追われ、追い越されたが笹平
- 淋し安曇野あの雪原を、見れば一と筋汽車の烟
- 四ヶ庄雪どこ炭薪積んで、櫓で曳き出す四ッ谷まで
- 小谷大網は越後の境、槍や穂高は飛騨さかい

坂 及び 峠

210/217

- 安曇佐野坂、南は木崎、北は姫川越後まで
- 蝶々追い越し又追い越され、春の佐野坂唄で越す
- 銜へぎせるで佐野坂越せば、固い手のひら煙草盆
- 春の安曇野佐野坂越せば、二十日おくれて花が咲く
- ◎小谷四ヶ庄は涙に曇る、此所は佐野坂別れどこ
- ◎心細々佐野坂越せば、築場あたりの夕時雨
- ◎雪は降るゝゝ積もらぬ先に、連れて越しましよ佐野坂を
- 積もる白雪佐野坂越して、櫓で客引く小谷まで

218/224

- 客の顔見て火を焚きつける、此處は法道の峰の茶屋
- 駄馬ぼくゝ大峯越して、附けて行くのは米と酒
- 薫る鈴蘭名も鷹狩の、山を越えれば八坂村
- 八坂ゝ路雑役（雌馬）牽けば、たうね（仔馬）後からぼくぼくと
- 科野坂（中房温泉への塗）越しゃどんごろ落ちて、菅の小笠に穴があく
- ◎安曇見納め鹽尻峠、雲に顔出せ爺ヶ岳
- ◎野麦峠で故郷を見れば、故郷隔てる雲と山

四 名 所

名 勝

225/229

- 城ヶ峯から引く春霞、花に影さず櫻澤（鼠穴に在り）
- ◎小丸山から明賀を見れば、續く麥畑青々と（陸郷村・恵光寺・岩城淵）
- 花の咲く時掛茶屋出来て、財布はたいて小丸山
- 下る犀川荷舟の中へ、小丸山から花吹雪
- 小丸山にて娘衆踊りや、県道行く人皆とまる

230/233

- 想い懸ければ千仞の谷も、越えてかけます登波離橋（池田町東1里）

- 藤の谷からつつじの谷へ、かけた虹かや登波離橋
- 水の流れの無いとはり橋、谷の藤浪水と見る
- 今日は見たゝゝとはりの橋で、上がる雲雀の背中見た

234/238

- 躑躅燃え立つ須砂渡の山で、人におどけて雉子がたつ
- 春の名残の山清路下り、舟に散りくる山つつじ (八坂村)
- 引いた弓ほど曲がりし川に、舟は矢を射る山清路
- 居谷里好いとこ絵にかくならば、直ぐに間に合う硯水
- 天王澤をば大町ヱ引かれ、居谷里池の鯉喉乾した

239/242

- 吹けよ川風つり橋を吹けよ、乳川つり橋夕涼み
- 乳川つり橋風吹きゃゆるる、風の合い間に渡らしゃれ
- ◎名こそ梓の水となれど、眺め涼しき上高地
- ◎槍や穂高を屏風にたてて、中に涼しき上高地

243/253

- 千草八千草神戸の原で、銀の鈴振る虫の聲
- 神戸原行きゃ茅萱 (チガヤ) の中で、晝も虫鳴く鈴虫が
- お月やちょろりと出りゃ神戸の原で、鳴くよ鈴虫やりんりんと
- 更ける秋の夜鈴虫鳴いて、月に明るい神戸原
- 昔船方虫鳴く草野、今は名に負うおかめ様 (神戸原・おかめ伝説)
- 南真々部の行人様よ、北にゃ細野のおかめ様
- おらが白金三枚橋は、京や江戸にも有りはせぬ
- 聞いてびっくり見て二度びっくり、此れが白金三枚橋 (穂高町)
- 三味や太鼓につい浮かされて、固い心もろて橋 (豊科町)
- 春は宮城櫻の名所、夏は木崎湖舟遊び
- 秋は登波離の紅葉を眺め、冬は佐野坂雪けしき

名 木

254/261

- 神代乍らの王子の櫻、枝に誠の花が咲く (垂仁天皇の御代から)
- 日頃目につく三本松も、櫻咲く時ヤよそに見る
- 縁が遠けりゃお詣りなされ、此處は下堀夫婦松 (烏川村下城諏訪神社)
- 乳川谷間のあのはは櫻、五月半ばに花が咲く
- おらが下堀一本杉は、今じゃ軍用地図に乗る
- わたしゃ代参たら木様へ、十月かゝさず月参り
- 此處は二ツ家傘松の、下で暫く雨やどり
- 谷の渋梨恨みは盡きぬ、なほも下れば侍女が澤 (白骨の下)

名 石

262/265

- 尋ね来て見よ冠着山 (姨捨山の古名) の、原に寝ねたる夫婦岩 (東筑、更科二郷)
- 此處は袖澤 (北安・廣津村) 炭焼衆が、話相手の木霊石
- 水に打たれちゃ又打ち返す、烏川邊の屏風岩
- 馬羅尾の大岩に禪をさらし、忘れ果てたる鬼や馬鹿だ

- 須砂渡登れば岩原城址、昔乍らの松の風 (烏川の南岸)
- 松のふんぐり日雀がつく、此處は岩原城のあと
- 此處は好いとこ盛親さへも、城を構えた小岩嶽 (南安・有明村)
- 耳が遠けりやお詣りなされ、安曇耳塚お塚様 (有明村)
- 白髪頭かぼうぼう髯か、尾花首ふる爺ヶ塚 (鼠穴北・尾花)
- 春の花岡山かげ行けば、櫻散り込む鬼の釜 (池田町東北・花岡鉱泉)
- 森の蝸(ひぐらし)夕日に咽ぶ、木崎湖畔の城の趾
- 日岐の城あと昔のままに、月は照れども草の原 (北安・陸郷村の一部)
- 中谷玉泉寺お墓の邊り、桂落葉に時雨降る

五 名 産

水 電

275/276

- 下々の下国の山国なれど、安曇や電気で花が咲く
- 晴れの都で花咲く電気、もとは安曇の谷間から

有 明 山 蠶 (やまこ、天蚕)

277/285

- 光る主さの兵児帯を見れば、光る筈だよやまこ入れ
- 光る羽織の糸入れ縞は、安曇野に飼うやまこ糸
- 信州安曇野、蠶(かいこ)の本場、山の木にまで繭が實る
- 娘揃うて菅笠たすき、唄でやまこの種はなす
- 青野眺めてやまこ屋住居、唄でやまこの番をする
- 昼寝するならあの山蠶(やまこ)小屋で、啼くよ郭公鳥を聴き乍ら
- やまこ番小屋隠居の昼寝、鳶ややまこを捕りに来る
- 安曇天蠶有明原の、この間隠れに咲く黄金
- 思案有明やまこに惚れて、うんと背負込む札の束

穂 高 わ さ び

286/291

- 安曇名産穂高の山葵、黄金白金砂に湧く
- 昔や荒地のあの葎藪も、今は山葵の花が咲く
- 穂高わさびと千代萩は、きいて涙がほろり出る
- 一と夜穂高のわさびとなりて、京の小町を泣かせたや
- いきな山葵につつまされて、辛いうき世で苦勞する
- 安曇名物数々あれど、泣いてほめるは山葵ばか

青 木 花 見 の 鯉

292/293

- 小石こいしで育ちし山葵、末は青木花見鯉のつま
- 恋に焦がれて青木花見通い、こいはこいだが池の鯉

松 川 み か げ 石

294/296

- わたしや松川みかげの石よ、固い上にも石固い
- 固い約束わしや花岡石、萬至末代変りやせぬ
- 松川名物お米とお蕎麦、神戸原なる花岡石

名 物 い ろ い ろ

297/307

- 忘れまいぞや松川どまり、月の好い頃蕎麦の頃

- 秋になる度び松川村を、思い出します蕎麦の味
- 色は黒くも愛嬌は無くも、人に好かるゝ松川蕎麦
- 音に聞こゆる松川蕎麦の、前の熱爛、松緑 (酒の銘柄)
- 池田通れば白壁見ゆる、あれは菊川あれは玉川、男山 (酒の銘柄)
- 牧じゃ大根、栗尾のお寺、チヤシで知られた離山
- 秋の牧原畑の中で、大根こぎこぎ高話
- 牧の娘のきりょうに見惚れ、大根わすれてから戻り
- 小倉大根と牧大根は、種は一つで味や違う
- 餘り大根は只でもよいと、馬でつけ出す牧の原
- ◎神田南瓜に岩岡大根、瓜は寺所菜は浅間

308/314

- わしが丹誠の板取蓑を、召すは何処の何んな殿御か顔見たや
- おらが鎧は板取蓑だ、雨よ矢の様に降らば降れ
- ほんに重宝だ板取蓑は、古くなりゃ又田の案山子
- 夏の盛りに大町行けば、冬を売り出す氷餅
- 嬉し恥し大町林檎、赤い顔して主を待つ
- 主を待ちゝゝ大町林檎、色に出でたよ赤い顔
- あの子見染めて會染行けば、たすききりゝと、袖も引かせず乾瓢ひく

315/316

- 鍬を頭の上まで挙げて、起す美麻の麻畑
- 小谷四ヶ庄は女子も好いが、馬の好いのに又惚れる

317/319

- 青い山から立つ白畑、あれは中村(陸郷村)瓦焼き
- 下手な顔して中村通りや、小口瓦の型に採る
- 瓦焼く衆は恐ろしものよ、鬼の頭を焼いて食う

320/322

- わたししゃ三鱗練炭育ち、色は黒くも熱で来い
- 昔乍らの宮本紙は、色は黒くも地が強い
- 紙を漉く子の小唄を聞けば、わしが思いは水の泡

323/327

- 春の風吹きゃお饅頭はしやぎ、二割損するおかめ町
- おかめ町にて売る饅頭は、兎角若い衆が買ったがる
- 年寄りや新橋飴呑みおいで、飴を飲むのにゃ歯はいらぬ
- 登る徳本峠の茶屋に、名さへ元気な力餅
- 夏のみやげにやりたや京へ、木崎湖の風、岳の雪

328/329

- 松川から出た安曇の踊、旅や他国で今盛り
- 安曇踊を汽軍へと乗せて、花の都へ上らせる

六 敬 神
神 社

330/337

- 穂高明神飾りが上手、仁科神明舞上手
- 穂高森から夕焼け空へ、啼いて舞い立つ五位の鷲
- 鳴らす柏手神代杉の、音に響いた神明様
- 池田八幡軍の神よ、仁科神明作の神
- 神戸原なる権現様は、安曇踊りの守り神
- 松や檜の梢がとちて、月もれないおたね様 (烏川の支流小野澤の畔の小祠)
- 細野船方年中霞む、香の烟りのおかめ様
- 一二三稲荷へ行く時やよいが、帰る時にはうろて橋

寺 院

338/342

- 彼の世此の世の話でのぼる、佛迎への満願寺 (西穂高・栗尾、)
- 安曇野の佛達が、此処へ寄って一夜を過ごした後に各所へ散る。
- 園無し草履が山ほどあがる、彼は栗尾の仁王門
- 首も無いのに両手を合わせ、首を栗尾の地藏様
- 石の段々幾つかのぼり、峯は栗尾の奥の院
- 栗尾の地藏様頭がでかい、牧の娘は目がでかい

343/357

- ◎十九大厄孕むか死ぬか、詣れ牛伏寺観世音
- 上野 (南安梓村・禪光寺) 米澤 (東筑寿村) お庚申様へ、遠い小谷や四ヶ庄から
- 梅に鶯日ねもす啼いて、春も長尾 (南安温村) の平福寺
- 石の地藏さま片足痛め、道に寝て居る安楽寺
- 明日も天気か暮れ撞く鐘の、音が好いぞえ法蔵寺
- 蓮の墓 (うてな) に法の燈捧げ、慈悲を松尾の薬師堂
- 花の御堂に慈悲の燈揺れる、名さえ尊き佛崎
- 牛の鳴くよなサイレンよりも、いきな弾誓寺の時の鐘
- 高いとこだよ霊松寺山は、安曇平を一眺め
- 大穴薬師へ日傘が續く、若衆あとから又續く
- 蟬の聲さへ暑くは聞かぬ、水の音添ふ泉福寺 (陸郷村大穴山)
- 南原なる六角堂は、上は三角下四角
- 三十三番仁科の札所 (若一王子神社)、詣れ大町南原
- 此の世乍らの極楽浄土、月の夜桜貞鱗寺
- 峯の薬師は尻つみ薬師、つまれつまれてのぼり行く (東筑坂井村・尻抓薬師様・尻つみ祭)

祭 礼

358/365

- 千草振る代の姿を見する、穂高祭りの飾り物
- 穂高祭にゃ岩山かざる、並ぶ杉の木蚊帳かけて
- 安曇名の出た王子の祭、馬に射手童乗り廻す
- 語り傳えて昔のままに、熊野権現臼祭り (臼を廻ってから神社へ行く風習)
- 春は下堀おいっとしよ祭り、鬻や島田に散る櫻 (四月二十日)
- ◎ささらほうさら出塚 (烏川村) の祭、栗の強飯アのどつまる
- 須砂渡山の神類無い祭、裸はだして舟擔ぐ
- 芝を擔いでお符禮渡す、梓八景山 (やけやま) 芝祭 (梓村焼山)

- 破れ窓から両手を合わせ、おがむ三日月主の為
- 鎌で切るよな三日月様へ、思い切れずに願かける
- 今は丑満草木も眠る、かける大願主の為
- さても恐ろし丑満時に、薫の人形に五寸釘
- ばかな願いは佛も聞かぬ、措（お）いて栗尾の満願寺
- 如何な大原お庚申様も、無理な願いはかのえざる

- たよる神様あの四つ辻で、四方に取り持つさへの神 (塞ぐ、道祖神)
- 手鍋下げても連添ひたいと、お多賀様へと月参り (下堀・夫婦松の小祠)
- いきな姿で幟をかつぎ、おかめ様へと禮詣り
- 誠積もれば祈らずとても、神は頭に宿らしやる

七 歴史

民間伝説

- 安曇平は神代の昔、深きえにし海のあと
- 水を治めて高瀬の畔、今もまします佛崎 (北安常盤村)
- 花の宮城昔を問えば、ギシキ籠りし鬼の村
- 鬼の籠りしあの宮城へ今ぢゃ来て住む都人
- 松尾山鳥女に化けて、恩の報いに羽を置く (矢助の話)
- 安曇電気の消えたる夜半は、牧のお小僧火唯一つ
- 晴れぬ怨みか幾代の後に、残る栗尾のお小僧火 (牧の荒神堂の邊)
- 穂高二本松物草太郎、遠き昔の夢の跡
- 躑躅(つつじ) 散り込む室山くぼの、太良法師の足の趾
- 見れば見るほど實すてでかい、太良法師の火打石
- 嘉助々と末代までも、安曇百姓の守り神
- 人は一代名は末代に、朽ちぬ嘉助の逆さ杉
- 嘉助にらめば念力徹り、お城かしがる其の日から
- 天狗岩からさらばの聲で、鬼となりたる信太郎 (のぶたろう)
- 久兵衛新田三年の稔、信が名残の忍び作
- 里を背にして深山に對ふ(むかう)、あれは馬羅尾の信の宮
- 童泣かせに夕日が消える、急げ山人山下り

- 天狗原山天狗の田植、唯の一夜のたとえぐさ (小谷温泉の奥)
- 静御前の昔を忍ぶ、此虚大鹽見えぬ原 (大塩・ミエノ原)
- 尋ねござれよ静の櫻、花の舞姫立てた杖
- 上籠山姥(あげろうやまんば)、石座の跡を、問へば應へる閑古鳥 (八坂村東部)

史実及び人物

- 昔なつかし木崎の湖畔、仁科城址に散る桜
- 昔鹽市今飴市と武士の情けを語りつぐ (12月の飴市)
- 佐々成政さらさら峠、今ぢゃ女子も楽に越す

- 貞享三年其の霜月の、二十二日は嘉助様
- 露の命は散らさば散らせ、嘉助五分摺り二斗 5 升

402/413

- 彼れは松崎の高橋様よ、四ヶ庄騒動も拝み行く 赤蓑騒動
- 残る誉は槍より高い、播隆行者の足の跡 (槍が岳に祠を作る)
- 登る宮城お婆が茶屋で、山の宮様お小休み (大正 12 年有明山神社前掛け茶屋・秩父の宮様)
- 天明行者は扇町生まれ、小山開いて名を残す (有明山を開く等)
- 河野先生は一目で知れる、日本アルプス山の主 (河野齡蔵大町小校長)
- 春日先生は鞆をあけて、なほも詰め込む土器の片 (大町中校長春日賢一)
- 牧の喜作が開いた道は、黄花石楠花右左
- 又も行かぬか中山先生、小判堀り堀り有峯へ (池田町中山喜一)
- おらは毎日田の草取るが、今に悦二郎天下取る (南安明盛村・植原悦二郎)
- おらが陸郷は村長様も、安曇踊の免状取り (遠藤喜壽)
- 笹部から飛ぶ長谷川飛行機、安曇平を一走り (長谷川清登)
- 信州松本国粹市長、五層天守よか名が高い (小里頼永)

414/416

- およし野に出て草刈る時は、桔梗の花だけ刈り残す
- 桔梗残して草刈るおよし、おらもなりたや桔梗花に
- およし草刈る赤芝原の、上で鳶が輪をかける (安曇野の美人は「およし」若いものは「五作」)

八 風 習

風 俗

417/429

- 八坂廣津の百姓はつらい、背なで厩肥しょい上げる
- 八坂馬どこ縹緞(きりょう) 好い娘でも、馬に乗れなきゃ嫁にせぬ
- 安曇娘の働き振りは、赤いたすきに雪袴
- 赤いたすきに紺雪ばかま、風情添えます菅の笠
- 昔からだよ鹿島の村は、増へず減らずの十二軒
- 鹿島男は皆山かせぎ、女借馬へ通ひ作
- 清水(常盤村)女は男にまさる、デツで酒飲み馬を牽く
(店頭でひっかける酒をデツパ、デツという)
- 馬の鞍山、メンパを附けて、今日も清水の女馬子
- 合わせメンパを只張合ひに、山で木を伐る日の長さ
- 背中あてからメンパを出せば、喰うと鳴いたる腹の虫
- 尾根の頭でメンパをあけりゃ、空で輪をかく山鳥
- お世話様だよメンパの中へ、黄粉ふりまく松の花
- 朝の出がけにメンパを忘れ、山でがっかりとくたびれた

430/432

- 蕎麦の焼餅片面焦がす、野麥自慢の大楯(ほだ)火
- ◎あげて廻して叩いて吹いて、噛(か)ぢる焼餅や大神楽
- 蕎麦の焼餅小豆を入れて、里のみやげにもたせやる

433/443

○谷のちよろちよろ水乗ッ越し車、一本杵にて麥を搗（つ）く（大麥）

○聞けば谷間のあのガッターは、ガタリガタリと夜もすがら

○夜の夜徹しあのバッサリは、月を汲んでは又こぼす

（水乗ッ越は水車、ガッターは十字の車、バッサリは一本棒）

○山が山抱く野麥の村は、蕎麦のやきもち稗の飯

○兄さ泊まし馳走は無いが、蕎麦のやきもちこがゝゝと

○加減ものだよ蕎麦やきもちは、直に火が付き焦げたがる

蕎麦は稷麥（ソバムギ）の略、実を碾（ひ）き蕎麥切り又は蕎麥搔き或は焼餅とす

○ちよいと凹みに深見澤五軒、思ひゝゝの家造り

○屋根は屑屋で竹槍を差して、挟んで引出し締める縄

○雪のアルプスこだつで眺め、俵屏風の冬ごもり

○四ヶ庄街道で嫁入りを見れば、たんす長持や櫓で行く

○櫓で客引く四ヶ庄の衆も、夏は四ッ谷へ踊り出る

慣習

444/449

○欲に目の無いはりかのだるま、購あてろよ目を呉れる

○玄蕃様では社務所の達磨、きゝめ有るとて二割高（南安拍矢町南・細萱玄蕃稻荷）

○霞む中房橋架け普請、鼠村中の男役

○渡り初めには人形が渡る、橋場、島々、雑仕橋（女名おせつ、男名清兵衛）

○法道辿れば傳五郎様に、願ひ上げたる石の数（池田町法道部落への峠、幣（ぬさ）として小石

○仁科大町借馬市場、證も取らずに馬貸せる

450/453

○いくら食うてもまだ喰え々々と、しげる氷室の大師講

○氷室大師講喰物しげて、出臍出たそだ其れ逃げろ（梓村氷室）

○竿の頭へすいのと鎌を、附けて除けます辰巳風

（汁の食物を救いとる竹網・秋に辰巳からの風は大低暴風）

○樽（くれ）を流した鹿島の衆も、歸る奮歳大晦日

丸太を四つ割りにし、芯材を取り去ったもの、板屋根をふく薄い板

九 老若

禿げ頭

454/460

○年は取りても昔の若い衆、白髪はやすもしゃれのうち

○安曇電気も光るにゃ光る、おやぢ頭はなほ光る

○禿げた頭に蜻蛉がとまる、とまりやすべるで又とまる

○菓罐頭で天日を取りて、ちよいと煙草を吸い附ける

○禿げた頭は床屋の儲け、同じ値段で刈るは楽

○床屋泣かせの禿げかん頭、顔か頭かわかりやせぬ

○頭禿げても踊にかけちゃ、光輝く音頭取り

娘

461/471

○赤いたすきに蝶々がとまる、娘二八の花盛り

○たんぼ好いところ五月になれば、野良に働く赤だすき

○春は花見で衣装をかざり、夏は田の草袖ぬらす

○茨の花をば黒髪さして、覘くどんぶら水鏡 (小さな水溜まり)
◎法道山里あの山蔭に、池田まさりの花が咲く
◎躑躅、石楠花、深山を照らす、きりょうの好い娘は郷照らす
○さとで欲しがるきりょう好い娘、八坂廣津の奥にある
○賤が伏屋も好い娘を持てば、王の臺(うてな)に増す光
◎娘年ごろ障子がもたぬ、障子目だらけ穴だらけ
◎目玉光るはとんぼかあぶか、人の障子に穴あけて
◎覘き見をして目をつつかれた、兎角覘き見ア目の毒だ

472/474

○姉は十七踊の上手、妹十六唄上手
○柳腰なら踊にやむきだ、嫁にしたてりゃなほむきだ
○安曇娘の化粧の水は、お花畑の花の露

475/477

◎娘一四五ほろゝゝ涙、百合の蕾にかかる露
◎泣いて眺めりゃお月も曇る、泣くなお十七目の毒だ
◎泣くな十七泣かずと語れ、泣いちゃ理も非も解りゃせぬ

478/479

◎来るな叩くな門田の水鶏、うちの娘は聳貰ふた
○心して吹けアルプス風(おろし)、嫁にやる娘の手が荒れる

嫁

480/483

○此方ら紫先や紅で、赤い耻(はじ)をばかきつばた
○柿の名所の陸郷村へ、柿をかづけに嫁さがし
◎松川田どころ良い米どころ、娘やりたや婿欲しや
○嫁に行く娘が落穂を拾ふ、これが吾が田の見納めと

484/492

○雪の佐野坂嫁入りゃ通る、見れば嫁様檣の上
○流行廃りは何でもあるが、嫁の丸髻昔から
○嫁は乗り込む聳小座敷で、嫌れな煙草を矢鱈吸ふ
○屋根へ上げたる草履もあるに、裸はだしで出て戻る (出様、出され様)
○姑婆と英語の文は、譯も解らずよめにいく
○憂いか辛いか青松くべて、烟がしみるか目に涙
◎娘見たさに来いと云うてやれば、見たくでも無い婿が来る
○春の花嫁もう此の頃は、お化粧どころか秋埃
○餅はとたんこあの杵たより、嫁は一代聳たより

十 人 情

人 情

493/494

○積もる雪ならかいても通る、義理は缺いても通られぬ
○夢になりとも持ちたいものは、金の實る木とよい女房

495/499

○雪は降るゝゝ古酒値上がる、新酒パイ一やれ頼む

- 酒も好きなら飲むぢや無いが、地金出なさりゃ一剥げる
- 外に文句はさらさら無いが、お酒あがるが玉に瑕（きず）
- 白馬錦で酔わせて置いて、其處で聞き度いあの事を
- 隠しだてして居るのぢや無いが、話しゃお主が歎くだろ

500/504

- 血筋なりゃこそ来てまで云うが、赤の他人は蔭で云ふ
- 今の人情は紙よか薄い、竹紙（ちくし）がみよかまだ薄い
- 境押し桐の木植えて、兎角欲にはきりが無い
- 揃ふようでも揃はぬものは、下手な踊と人ごゝろ
- 人の心は年ゝかはる、何時もかはらぬ岳の雪

505/510

- 信州安曇はなつかし所、おらが嬢さの生まれどこ
- ◎見れば戀しやあの野の果ての、雲のあたりか吾が郷は
- 心がらだよ我が土地を捨てて、知らぬ他国で苦勞する
- よそへ電気で働くなれば、うちで親達ア行燈する
- 昔や行燈で夜なべもしたが、今は電気で早寝する
- 親をだまして金持ちだして、茶屋でこきのき（徹底的）だまされる

511/517

- 安曇電気のあかりのしたで、白い狐にばかされる
- 狐小路（穂高町）と承知をしてて、晝の日中にばかされる
- 狐小路で目尻を垂らしや、よどり抜かれる尻毛まで
- 狐小路でばかされ抜いて、又も思案のうろて橋
- 岳の凹みにゃ根雪が残る、迷う色町気が残る
- 岳の道にせ迷わぬものが、里の色町踏み迷ふ
- 外面如菩薩内心如夜叉、男殺しのあの笑凹

518/521

- 策にゃ咲けどもあの岩隠れ、心小さな米躑躅
- 咲くにゃ咲けどもわしがよなものは、日蔭さきにて色薄い
- 山の中でも苦はアルプスの、深く積みたる峯の雪
- ◎わしの思ひと谷間の雪は、夏の土用でも解けはせぬ

522/525

- 四〇ゝゝと鳴く鳥や憎い、三十九だもの花だもの
- 昔ザレーで柴舟エ乗せた、幼馴染が忘らりよか（砂礫のザレ場を滑り下りる）
- 何と云はうが又云はれよが、しだれ柳に春の風
- ◎首になりたやきせろの首に、たとへ落ちてても又すがる

世 態

526/527

- 池田飴市出は出ちゃ見たが、銭が無ければ見て通る
- ◎銭も無いのに買ふ々と、烏買う々と鳴く

528/531

- 高瀬川原に狐は出ぬが、狐出ますよ吾妻町

- お茶屋勤めと高瀬の砂は、流れ次第で西東
- ◎高い山には霞がかかる、きりょうの好い娘にや金かかる
- 淵は瀬となり瀬は淵となる、娘年をとりや婆となる

532/534

- 憎い嫁御の腹から出ても、孫はかはゆい變なもの
- 嫁が出て行きや姑が悪い、姑隠居しりや嫁悪るい
- 一度こはれて二度目の縁にや、ござる嫁御もたうね付き (雑役馬の仔馬 (ト一ネ) 連れ子)

風 刺

535/539

- 春のおぼろ夜南を見れば、狐小路で灯をとぼす
- 三味や太鼓の色町アそばだ、ロハで聞いてりや怪我は無い
- 尾花まねいた赤芝原に、招くお茶屋のあの暖簾
- ◎招くまいぞえお茶屋ののれん、幾ら招いても銭が無い
- 伊勢の古市を出て来る時は、腰に金気はきせろばか

540/543

- 朝のサイレン會社で鳴らす、夜はお茶屋で三味鳴らす
- 三味の二上り調子に乗れば、うちの身上は三下がり
- 身上すつてもひげだきや創らぬ、次の選挙にや又も出る
- わたしゃテントキ細野のわらび、一度折られて二度出る

544/545

- お主や法螺吹きならしやれ風に、風は諸国を吹き廻る
- 門の豆蔵と葎原雀摺れて減らぬか舌びらが

546/550

- 山へ山へと来る人たちに、少し田の草取らせたや
- レビューガールが権蔵をはいて、お尻振り振り踊りやよい (薫製の永沓・権蔵考案)
- 町の若い衆は大根の輪切り、色は白くも水臭い
- や一れ頭にや味噌玉よりも、穴が五つも餘計ござる
- 破れ頭巾と世間の噂、たまにちょいちょい耳かかる

戀 愛

551/559

- 色は白くも烏川生まれ、小石々々で黒うする
- 人にや云われず岩城の淵 (陸郷村小丸山の麓) の、深い思ひで気が沈む
- 高瀬鰻のあの胸のうち、小石々々で沈み勝
(烏川原の小石は黒い・鰻は砂礫を含み流れに押し流されぬよう身を沈める)
- 軒の梅をば附けに通ふ、梅が散るなりや何をかづけ
- 燃ゆる思ひの須砂渡の躑躅、君に一と枝さゝげたや
- 苦しか思ひのかなわぬ時は、馬羅尾へ這上り鬼となる
- 情冷めたい石地藏様を、蔦は絡んで紅葉する
- 燃ゆる思ひのあの蔦紅葉、抱いて離さぬ石地藏

560/564

- わたしゃ安曇の野に立つ松木、君を待つ気で立ちあかす
- ◎来るか来るかと麓を見れど、今日も駒鳥なくばかり

- ◎聲はすれども姿は見えぬ、主は萱野のきりぎりす
- 主は松川わたしは池田、間も川原で松ばかり
- ◎さぞやさぞゝゝさぞ今頃は、さぞやさぞゝゝ待つである

565/568

- ちよいと會染つい深くなり、今ぢや浮名の高瀬川
- 逢瀬数々数重なりて、流す噂の高瀬川
- 忍ぶ岩間のちよろちよろ水が、情梓の川となる
- ◎好いた水仙好かれた柳、心石竹気はもみぢ

569/576

- 小石こいしの間に咲いて、妻となるかやあの山葵
- ◎主とわたしは川ばた柳、みずに離れちゃ暮らせない
- 主とわたしは谷間の雪よ、積りつもりて深くなる
- 胸の中村（陸郷村）戀故曇る、逢ひに生野（東筑東川手村）は川向ふ
- ◎お前行くならわしをも連れて、東や上總の果てまでも
- ◎心意気さへ届いたなれば、逢うは五年に一度でも
- うまい言葉に乗鞍ヶ岳、もゆる思ひは焼ヶ岳
- 顔はぼたもち手は豆餅で、主を尋ねて黄粉餅

577/579

- 主は浅間で私は深志、丈も立たずに片思ひ
- ◎梯子かけても届かぬ時は、空の星だとあきらめろ
- 矢竹笹竹思ひの丈は、鎌で切られず思ひ切る

別 離

580/588

- 主さ行くかえ安曇を捨てて、安曇野末にわしを捨て
- 安曇野末にお前を置いて、よそへ行く気に誰ならず
- かねて覚悟は下掘りなれど、様に引かれるうしろ髪
- 名残り惜しさよ此宵の座敷、鳴くな鶏あしたまで
- 幼馴染に別れる時は、曇る常念涙雨
- 假りの別れで又逢ふ事の、有りと思へど袖時雨
- 君と別れの涙の雨か、見れば黒澤（南安・小倉村）曇りがち
- 涙雨かや空飛ぶ鳥も、ないて別れる烏川
- 心残りの有明山に、つらい別れも金の為

589/598

- 君を送りて佐野坂峠、水も別れる北南
- 名残り押野の橋から見れば、山も雲間へ出て招く
- 妻は出て行く乳呑みは残る、秋のさ中に雪が降る
- 去りし女房の大きなでんぼ（形の良くない足）麥を踏む度思ひ出す
- ◎廣い狭いと吾が居たところを、今はよそ目で見て通る
- 泣いて別れて涙がしみて、色に出たよな草もみぢ
- 袖澤（北安・廣津村）越す時や狭間の霧で、又も袂をしめらせる
- 霞む鉢伏（山名）えゝまゝならぬ、諏訪と安曇は裏表

- ◎切れてしまへばばらばら扇子、風のたよりは更に無い
- ◎空を飛ぶ鳥もの言ふならば、たよりを聞きたや聞かせたや

厭世 —————

599/602

- 花は散る散る踊子は帰る、諸行無常の鐘のこえ
- 諸行無常と鳴る鐘憎や、鐘の鳴る度花が散る
- ◎わしが死なうと誰泣くものか、山の鳥が鳴くばかり
- ◎山の鳥もただ鳴きゃせまい、墓の團子が喰ひたさに

—————

603/608

- 積もる思ひの落葉をよせて、焚けば烟に泣かされる
- ◎泣くな歎くな日かげの紅葉、なんぼ泣いても日はさゝぬ
- 月も宿らず汲む人も無し、木の葉がくれの谷の水
- 主は岩檜葉わしゃつりしのぶ、共に深山の日かげ草
- 高瀬川原の真砂の数は、数へ盡きても苦は盡きぬ
- 雲の上なるあの白馬の、花となりたや次の世は

悟道 —————

609/612

- ◎獨り暮らしは枯木に劣る、花も咲かなきゃ實もならぬ
- ◎後生願やれ爺さま婆さま、年寄り来いと鳥鳴く
- 綾にくるまり錦を着ても、末は同じく芝頭巾
- ◎何が何でも牡丹餅や米だ、つける黄粉は豆の粉

—————

613/616

- ◎月にむら雲花には嵐、とかく浮世はまゝならぬ
- ◎まゝにならぬとお鉢を投げりゃ、其虚ら一圓飯（まま）になる
- 登り降りアルプス街道、起きるころぶは世の習ひ
- 岳の頭でわが袖はたき、積もる浮世の塵を拂ふ

樂天 —————

617/623

- 軒のすぐり（直氷スガヒ、垂氷ツラヒ、氷柱ツラ）に月影させば、おらが藁家も玉簾
- 根さえ枯れなきや埋もれて居ても、春は世に出る露の臺
- 時が来りゃこそ白馬岳の、雪の中でも花が咲く
- ◎花も舞ひ込みやお月も覗く、果報寝て待て破れ窓
- 破れ窓をば覗いて呉れる、春の訪れ梅の花
- 内はせまくも天地や廣い、廣い天地や戸口から
- 鈴や太鼓で春馬舞はず、厩で尻こき馬目を廻す

春馬＝春駒、童の春の遊び、各戸を廻る乞食芸人、馬の鈴等で囃す

祝賀 —————

624/628

- 主の壽や蓬莱山に、遊ぶ鶴亀千代の松
- ◎沖の島山蓬莱山へ、珊瑚瑪瑙の寶船
- 武運めでたく故郷へ錦、飾るお主が身のほまれ
- 今宵目出鯛手樽の酒で、祝儀するめ苧よろ昆布
- 目出度芽が出て咲く初花に、とまる蝶々の程のよさ

- 夏は重寶だおらあばら家は、蟬が来て鳴く床柱
 ○屋根は屑屋で穴さへ見える、穴に熊蜂巣が見える
 ○えさをたたんでけみやにしこりゃ、おえの真ん中でごいそ切る
 　えさは居宅、けみやは納屋、しこるは引籠る、おえは広間、
 　ごいそは牛馬飼料の豆や藁
 ○此年や不景気お盆が来ても、ゆかた一枚着らりゃせぬ
 ○高い山でも越しょうで越すが、越すに越されぬ盆と暮
 ○隠れ蓑笠若し有るならば、盆と暮とにゃ借りて着る

- 白馬おろしの身にしむ頃には、金も無くなる米も無い
 ○夜毎日毎に寒さはまさる、質を受けだす金は無し
 ○なぜか師走は吹く風寒い、寒い筈だよ銭が無い
 ○うちの寶は子寶ばかり、暮れの勘定の間にや合わぬ
 ○豆で居るうちや容赦はせぬと、味噌を突くよに責めはたる
 ○まめで居ります腹減って居ます、送り下され米と味噌

- 越すに越されぬ年の瀬越して、見れば貧乏神や先き廻り
 ○藁の軒端に過ぎたるものは、くぜる日雀と梅の花
 ○慶長検地の芝刈り様が、今じゃぼろ着て草刈りだ
 　検地以前の百姓を芝刈り様、数戸の門屋を有す

- 越後屋根屋と燕の鳥は、春に出て来て秋歸る
 ○天保銭ばか潰して居ると、仕舞にや鋳物師屋罰ア當る
 ○酒屋働きを亭主にしたら、冬も布子に用が無い

- 晴れた大空男の心、雲の狙徠は雲に問へ
 ○親の意見と白馬おろし、夏の土用でも身にしみる
 ○親の意見とわさびはきいて、根からうらまで無駄がない
 ◎しんぼして見ろしんぼがおもだ、廻る車もしんぼから

- おらが身上と案山子の笠は、穴がたんとで骨折れる
 ○さても貧すりゃ団栗眼、閉じて遣繰り考える
 ○米を取る田に桑の木植えて、米は喰う気か喰わぬ気か
 ○稼ぎ盛りをぶらぶらしてりゃ、糸瓜野郎だと笑われる
 ○露を分けわけ刈る朝草の、つらい勤めで袖しぼる
 ○たんす長持や幾棹來やうが、たんす長持や野良へ出ぬ
 ○きじら苦にしろみやまし智だ、今にこげたま貯めるづら
 　きじらは爐邊の薪置場、みやしまは勤儉、こげたまは徹底的に
 ○信濃富士ほど俵を積み、歳の高瀬を楽に越す

○うちは狭くも胸もと広い、人にたよらず立つ烟

興世

660/670

○十個、勘左衛門、矢原の堰で、黄金渦捲く水が来る (安曇野拾ヶ堰)

○矢原彌三郎はりつけ柱、立てて開いた矢原堰

○十個伏越筑摩の水を、引いて安曇の稲實る

(穂高・白澤民衛門、下堀金・平倉六郎右衛門、柏原・中島輪兵衛、等々力孫一郎)

○松の木立の真ん中にちょっと、禿げた岩原坊主山

○松を植えたら離れ山の、坊主頭に毛が生えた

○尾根に道あり凹みにあらし、山で名題の一の澤

○山の裾まで新切を起し二男三男分けて出す

○小倉林の開墾畑、上納要らずの蕎麥の花

○高瀬赤芝時節が来れば、芝も花咲き粃が實る

○共に精を出し豊かにすれば、浄土極楽娑婆(さば)にある

○御代は治まれ仲良くまるく、俺等が踊の輪のやうに

十二 時候

春

671/674

○櫻三月とは暦だけ、安曇平にゃ残る雪

○春は名ばかりアルプス山も、笑凹々に残る雪

○山のはざまは春とは云へど、笹にさら々降る粉雪

○麥が取れると思へば嬉し、安曇野に降る春の雪

675/780

○岳は白雪端山は櫻、里は霞が七重八重

○花の蔭から山々見れば、峯の白雪や枝の上

○里で散る花麓でさかり、山の上ではまだ蕾

○峯の石楠花、麓の躑躅、五月安曇の花ざかり

○花が葉になりゃ大洞山(松川村)の、木の間に啼くほととぎす

○春の安曇野花田が續く、花の中から揚げ雲雀

花田は一面の紫雲英(レンゲ草)、田へ新緑の梢やボヤを踏み込んだ(新ら踏み)

夏

781/782

◎誰か行かぬか馬羅尾の奥へ、土用半ばに雪を取に

松川村馬羅尾は昔領主の御山、入會のための争い多し

○南瓜からんで手水場(便所)ゆがむ、直す間も無い蠶時

783/785

○夏は白馬や木崎のうみに、小町業平避暑に来る

○夏は安曇野東が白みゃ、登山電車が北へ行く

○日本アルプスあの雪を見れば、扇子たたむよ電車窓

786/788

◎盆にゃござれよお盆にゃござれ、佛様さへ盆にゃ来る

◎お盆々々とまつうちやお盆、お盆過ぎれば何を待ちる

◎お盆過ぎれば草刈る野山、草に蜂や居てチクリ刺す

- 里で黄金の浪打つ頃は、山も紅葉の錦を織る
- 情冷たく降る秋雨に、山の紅葉はなぜ燃ゆる
- 肩を叩いて振り返らせて、秋の木の葉の暇乞ひ
- 落葉焚いたらどんごろ（團栗）はせて、飛んだ所があつゝのつ
- おらが高帽は昔のもので、時雨くらいぢや色あせぬ
- 唄い通せば霜枯れぎすの、こえも切れ々々秋の風

- 積んだ焚きものえさ（居宅）より高い、安曇山家の冬ごもり
- でかいゆるり（圍爐裏）ででかい櫓焚いて、でかい話で藁細工
- 白髪頭に櫓火のほこり、積もる四ヶ庄の冬籠り
- 障子細目にアルプス眺め、寒い風だとハクショする
- あけりゃ寒いし立てれば暗い、煤け障子の張りかんば

十三 豊 作

- 八十八夜は種まき盛り、霜を案じる九十九夜
- 雪のアルプス代田にうつし、山の上まで種をまく

- 安曇十五里ただ一枚で、敷いたれんげのはなむしろ
- ごろり寝からかすぢやうめ草の中へ、空で日一步雲雀鳴く
- 誰が蒔いたかあのぢやうめ草、田からこぼれて畔で咲く

- 東山中で生れた馬も、五月馬市里へ出る
- 五月馬市大町行けば、ヒンワンワン馬だらけ
- 五月借馬電車におどけ（驚き）、跳ねるあだける（あらびる）荷をむくる（転覆する）
- 昔からだよ水内の駒は、五月安曇で苦勞する

- ◎馬耕のあとから娘がこぎる、こぎる其の手に豆七つ
- 五月てきなや（疲労の意）晝休みしても、夜は小早やに寝とござる
- 代の車に乗るお若い衆、下手に乗るなよ口車

- ◎五月田植にや皆菅笠で、姉か妹か解りやせぬ
- 負けて恥かし田植の時にや、赤いたすきの後になり
- ◎や一れお十七初めて田植、よけろどんびき邪魔になる
- 口の早さよ苗挿す遅さ、菅の小笠に尻を押さる
- ◎田植盛りにや泣く児を欲しや、畦に腰をかけ乳を呉れる
- きりょうの悪いのが揃たと思や、今日の早乙女男ばか
- 今日の早乙女野郎ばか揃た、でかく頼むぞ胡麻むすび
- 百姓急がし仕付けの時は、なりも姿も見らりやせぬ
- やごめ爺が又愚痴をこねる、田植時ばか嬢欲しや

農休み 821/822

- みんな精を出し田植をすませ、踊りましょかえ農休みに
- 踊れ農休み紺雪ばかま、白地手拭赤だすき

後田 823

- 口の鐵砲でたゝ畦からまくる（追ふ）、麥の後田の群雀

田の水 824/825

- 人の田の水うらやむよりも、止めろわが田の穴漏り
- 先祖代々ぬるめの口に、あてた止め石を盗まれた

田の草 826/839

- ◎小田の蛙の鳴く音も憂しや、早く田の草取れゝゝと
- 並ぶ菅笠田の草取りの、背中かすめて飛ぶ燕
- 畦のよしきり田の草取りと、負けず劣らずぺちやくちやと
- ◎同じぼろ着て田の草取れど、見ればお十七や腰細だ
- 田草取る娘の汗かく顔に、赤く染まりし笠のひも
- 着塵赤すげ（赤菅笠）降り照り知らず、いつも放さぬ田草取り
- 背なに青ん葉腰には火縄、七つ道具で田草取り
- 蟹は横這ひのけさは背中、田草取る子は四つん這ひ
- 百姓田螺か泥田の中を、日がな一日這ひまわる
- 日日毎日田の草取りで、頭上がるとこ見た事ア無い
- ◎腰の痛さよ青田の廣さ、一両四貫の日の長さ
- 拂ひ田の草塗り付け乾せと、青葉隠れの鳥が鳴く
- さてもてきなや田の草取りは、稲の株つを杖に突く
- ◎朝の五時から田の草取れば、お日の入りには腰や立たぬ

野菜 840/846

- おらが畑に實りたる南瓜、おらが喰べるにや錢や要らぬ
- 南瓜ぼちゃ々々ぼちゃ々々南瓜、南瓜ぼちゃ々々土手南瓜
- 三本小屋でも南瓜が絡みや、花も實もある其の眺め
- 夜さり来て見りゃ夕顔畑、花は見ゆれど葉は見えぬ
- お月や出たゝゝお月に出られ、南瓜盗人身を隠す
- 安曇踊と南瓜の花は、夏にならねりゃ實が入らぬ
- 安曇踊と夕顔の花は、晝はつんぼで夜開く

蠶 847/855

- 山中やまなか姿振りを忘れ、主と二人で蠶飼ひ
- 四方山でも安曇の里は、米や蠶で札が降る
- 別れ霜から初霜までは、安曇平の蠶飼ひ
- 蠶棚には春夏秋と、黄金白金花が咲く
- 蠶せはしゃ春夏秋と、娘盛りもたばね髪
- 立つちやしやがんぢや又立ちやしやがみ、休む間もない蠶時
- 夏の安曇は蠶の棚の、南の山から夜があける
- 夏蠶上げれば米味噌背負ふて、科野坂越し中房へ

○蠶飼って見ても百姓して見ても、元屋元助酢やたまり
烟草 ————— 856/858

○たばこ畑で手は脂だらけ、さがる前髪を其のまゝに
○煙草畑に吹く風悔しや、出来ぬものかや箱詰に
○たばこ買ふ錢を持たない時は、たばこ畑で息をしろ
土方 ————— 859/862

○石を枕に土方の晝寝、いびき高瀬の土手のかげ
○高瀬土手のかげ土方のひる寝、蟻子這ひ込む鼻の穴
○天気好い日は土方に出るが、雨の降る日は藁細工
○晝は土方で夜は夜なべして、これで喰へなきや化けて出る
案山子 ————— 863/867

○角屋新切穂が出揃へば、えらい顔して立つかゝし
新切は池田町素封家角屋関氏の開田
○黄金渦捲く稲田の中で、かゝし鼠の子を孕む
○さても五作によく似た案山子、似てる筈だよ五作だもの
◎主に逢ふとて裏から来たら、畦の案山子に睨にら瞰まれた
○秋もすがれた神明沖に、畦を枕で寝た案山子

収穫 ————— 868/877

○神の力で乾したる海に、黄金浪打つ稲の出来
○穂浪ゆたかに黄金の風が、安曇十五里吹きわたる
○黄金渦巻く折松たんぼ（池田町の新田）、中の小島は十郎松
○帆に穂、穂に々々穂に穂が咲いた、粃が取れるぞおらが里
○秋の夕日はまねっくりを突いて暮れる、月夜あかりで庭じまひ
人が顛倒することを「まねっくりを突く」という
○取れた御禮にや地主へ年貢、お天道様へは言葉だけ
○わしのお守りや片倉様の、倉でこぼれた粃の粒（松川に諏訪片倉組の支店があった）
○穂屑こなしでべえた（棒）べえた、あたり合ふ時や手がしびれ
○寒むや北風つめたや時雨、安曇少女の穂屑たて
○秋の取入れすまないうちに、槍や穂高は雪に寝る

山仕事 ————— 878/884

○春は柴刈り鍋背負うて行かず、獨活（ウド）やわらびに落し味噌
○杣小屋では汁鍋かけて、入れるうどの芽摘みにでる
○鎌と鉋有りゃ暮らして行ける、まめで達者でまた山稼ぎ
○山で木を伐るきこりでさへも、花の咲く木は伐りかねる
○馬羅尾の小場にて晝寝をすれば、鳥つけ廻す空メンパ
○縄が無くなりや藤蔦たぐり、薪を束ねてしょひ下す
○笹葉まじりの柴刈って来たら、里でみそっちょ（みそさゝい）に笑われた

————— 885/888

○穂屑儲けの小作じゃ食えぬ、秋がすんだら山稼ぎ
○風の吹く日の萱刈りやつらい、萱で手は切る風しみる

○今日もがち山日んがら一日（ひいで）、雪は降るゝゝ手はかける

山稼ぎする事をがち山

○はアて雪（薄雪）や来りゃ鳥さへ鳴かぬ、今年やおしまひ山仕事

炭焼き

889/893

○山の奥でも煙草の火には、事を缺かずに炭を焼く

○馬羅尾の山奥炭焼き住まひ、背戸にや松風岩清水

○東山でも俺らよな野郎が、炭を焼くのか烟が立つ

○馬羅尾の炭やき五日に一度、里へ出て来る酒買ひに

○わたしゃ奥山谷間の小鳥、たまに逢ひます炭焼きに

894/899

○山の中でも炭焼やえらい、太い烟で世を暮す

○わたしゃ炭焼、紅葉の山を、心ならずも曇らせる

○西の山にも炭を焼く烟、東田澤にや瓦焼き

○親の代から炭焼やしても、腹の中まで黒か無い

○秋がかたつきや西山さして、素人炭焼やぞろ々と

○はアて雪ア来て増えたるものは、山で炭を焼く烟の数

藁細工

900/903

○雪に埋もれた安曇の在所、彼の家此の家の藁たゝき

○日向ぼっこで以て藁細工すれば、藁は乾ぐ（はしゃぐ）し目はとろい

○團爐裏取りまき大火を焚いて、冬の三月を藁細工

○冬の夜なべにや長物語、縄に絢（な）ひ込むしゃり々と

雑

904/910

○俺らがでんぼは村一でかい、麥を踏む度び頼まれる

○本家新宅一枚畑、作り分けたる豆と蕎麦

○畑で別れた親芋子芋、めぐり逢うのが鍋の中

○春は種まき馬耕代田植、夏は田の草腰ア曲がる

○秋は稲刈り取り込む俵、冬は藁細工手が凍げる

○何が何でもお百姓様は、米の實る木の番をする

○米の實る木の番するからにや、初穂神様次ぎや俺らだ

十四 天 象

日

911/914

○雪の化粧のアルプス山へ、のぼる初日が紅をさす

○岳の峯だけ朝日がさした、安曇平はまだ夜中

○越した峠に入る日ものどか、空に夕焼け夕雲雀

○信濃富士へと夕日が落ちりゃ、押野崎からのぼる月

月

915/921

○庭は狭くも安曇野續き、照らし下されお月様

◎月の見頃は八月半ば、蕎麦の白花盛り

○月のよい夜は水鶏でさえも、鼓を打ちますポンゝと

○お月や照るゝゝ木戸橋あたり、川（犀川）を見おろし夕涼み

- 煤ぐれ提燈さげても暗い、お月をたよりに越す山路
- 飛驒の空から二日の月が、安曇平をちよと照らす
- 西の山から端（は）あの三日月と、人の盛りは云う小間だ

922/928

- お月様でも三日月や凄い、丸い十五夜見て踊る
- 月の出頃にや踊子衆も、意気な姿で辻に立つ
- 月が雲間へちよと顔出せば、踊る娘衆顔隠す
- お月や照るゝゝ涼しい月が、俺等が踊の輪の上に
- おらが踊の輪のよな月が、落ちて行きます飛驒の空
- 裏は飛驒かよ山端へ急ぐ、月に言いづけ頼みたや
- 月が飛驒へと落ち行く頃は、安曇や夜明けで鶏が鳴く

星

929/930

- 南瓜畑で立てたる風呂は、高い屋根だよ天の川
- アルデバランが山端に沈む、燃ゆる思ひの其の色で
- アルデバランは牡牛座のα星、赤い色

夜

931/936

- 槍の穂尖に三日月様が、鎌をかけたる宵の口
- 夜さり通れば青木花見（あおけみ）穂高、闇に花浮くわさび畑
- 夜道淋しや牧原遠く、見ゆる栗尾のお小僧火
- 月は傾く夜はしんしんと、心細さよ瀧の音
- ◎葦の葉摺れか川瀬の音か、夜更け淋しやさらゝゝと
- 安曇平の夜はほのぼのと、岳の雪から明けかゝる

十五 気 象

雲

937/939

- 天気變るか有明山の、腰に結んだ雲の帯
- 明日は雨降り鉢伏山の、雲も動かず日が暮れる
- 四方曇りで夕立ちもやう、早く行きたや四つ谷まで

霞

940/941

- 安曇野の末霞に浮かぶ、牛の背のよな山の数
- 京へやりたや霞の絹に、萌ゆるわらびののしを添へて

霧

942/945

- 小倉黒澤まいたる霧に、浮かぶ室山、松木立
- 高瀬川霧晴れ間を見れば、池田八幡松の森
- 山の朝霧谷から捲いて、屋根の杣小屋捲き残す
- 霧のだんだら横縞がすり、派手な姿で鍋冠り

再縁の女子は鍋を冠って踊った

虹

946/948

- ◎烏川谷朝虹や吹いた、岳へ登るな川越すな
- 降りし春雨夕日に晴れて、高瀬川原に虹の橋
- 高瀬川原に立つ夕虹が、染めて見せたる進上松

雨

949/953

- 四方の山々春雨呼べば、間の安曇野花曇り
 ○雨の降る日はかなゝゝ蟬（蛸ひぐらし）が、日暮知らせる柚の小屋
 ○蓑を着りゃ晴れ脱ぎゃ又も降る、仕事手交ぜな村時雨
 ○神戸出ぬけりゃ枯野が續く、枯野小一里村時雨
 ○峯は雪降り麓はみぞれ、里は時雨でみのや笠

露

954/955

- 一つゝゝに月かげ宿る、草の葉末の露の玉
 ○草の葉末に宿れる露は、踊る拍手にはらゝゝと

霜

956/957

- 日向山には頬白鳴くに、日かげ山には霜柱
 ○霜が降るゝゝ九十九夜過ぎに、百姓泣かせのおくれ霜

雪

958/960

- 尾根は別でもあの白雪は、解けて一つの澤となる
 ○岳の萬年雪や安曇の里の、ひでり知らずの水のもと
 ○土用の日盛り一と皿欲しや、お花畑にのこる雪

961/965

- しめる北窓見果てぬ山に、解けぬ思ひの雪が降る
 ○破れ障子を泣かせる風は、白馬おろしで雪まじり
 ○白馬風の持て来る雪は、破れ障子を越して降る
 ○雪は降るゝゝ乳川は淀む、大洞山には雉子が鳴く
 ○雪は降るゝゝさて落ちぶれりゃ、常盤午前も権蔵ばき

木 花 氷

966/969

- 今朝の寒さに咲いたる木花、京へ一枝送りたいや
 ○冬の木花は一夜に咲いて、朝日あたれば露と散る
 ○軒の三尺氷柱が下がり、五尺戸間口出らりゃせぬ
 ○南風吹きゃ氷も解けて、温むどんぶら蛙鳴く

風

970/971

- 踊る娘のあの振袖の、袂ふくらむ春の風
 ◎昨日北風今日南風、あすは他国へ辰巳風

十六 花

972/973

- うちは藁葺きにごらのよでも、春は庭さき梅が咲く
 ○娘見たさに軒端の梅を、咲かぬうちから来て褒める

櫻

974/979

- 八重の花より一重の花の、色香ゆかしや山櫻
 ◎櫻花なら一枝ほしや、かはい彼の子の目を覚ます
 ○わしもなりたや権蔵様の、花の盛りを宮守りに
 ○道は無けれど花咲く頃は、小路やつきます山櫻
 ○里の櫻の葉となる頃は、深山櫻の花盛り
 ○残る白雪まだらとなれば、咲くよ深山の遅櫻

- 残る雪かやあの枝の先き、雪が香ろか花こぶし
- 先に立ちたるやの字の帯へ、桃の花散るほろゝと
- こぼれ菜種のさびしい花も、咲けば蝶々が来てとまる
- 咲いた菜種に蝶々がとまりゃ、憎くや風めが振り離す
- 路に咲いたるくじな（たんぼぼ）でさへも、餘り踏まれりゃ横に咲く
- 黄なたんぼぼやがては白髪、末は坊主で世を終わる

躑躅 —————

986/993

- 雪に埋もれたあの山つつじ、固い蕾で春を待つ
- 春を待ち得たあの山の端で、岩に抱かれて咲くつつじ
- 岩に抱かれて咲く山つつじ、咲くにゃ咲けども實はならぬ
- 低い木振りで咲いては居れど、固い根じめの岩躑躅
- 固い根じめの岩間のつつじ、引くにゃ引かれず見るばかり
- ギンキ八面籠もりし山の、春を彩る鬼つつじ
- 畦にさしたるあの鬼つつじ、苗間のぞいて水鏡
- わたしゃ奥山岩間の躑躅、遅く咲いては早く散る

石楠花 —————

994/997

- 岩を抱寝に咲く石楠花よ、山の奥にも戀は有る
- 山の石楠花眞紅の色も、盛り過ぎれば褪め易い
- 解けぬ白雪根に持ち乍ら、咲くよ石楠花岩のかげ
- 道が有るなら彼の石楠花を、取りに行きたや岩の上

藤 —————

998/1000

- しめて絡めば松木も枯れる、心無いぞえ藤の花
- 枯らすつもりで絡むぢゃ無いが、松をたよりの藤のはな
- 藤がからめば枯木でさへも、枝に葉が出る花が咲く

茨 —————

1001/1003

- 裾のおんぼろなぜ引き止める、惚れて止めるか茨の花
- 野道通れば茨引きとめる、茨よ放しやれ日が暮れる
- 咲いて出たとて誰見るものか、どうせ野末の茨の花

朝顔 —————

1004/1005

- かはいそうだよあの朝顔は、其の日限りの笑ひ顔
- 露の乾ぬ間に朝顔散りて、畦の晝顔蝶を呼ぶ

種々の花 —————

1006/1011

- 野邊のちごゝ白髪の頭、風が吹いて来りや丸坊主
- 畦の頭の薊でさへも、一度花咲く春はある
- 眞夏咲き出すあの鳳仙花、燃ゆる唇紅の色
- いきな花だよ忍冬の花は、金と銀とに咲き分ける
- 暗い谷間もあの鈴蘭の、花の香りで夜が明ける
- 賣れて行きます咲かないうちに、深山鈴蘭町で咲く

月見草 —————

1012/1014

- 月の無い夜は何を見て開く、梓川原の月見草
 ○月に呼ばれたかたんぼの土手で、返事をして咲く月見草
 ○かはいさうだよ闇夜に咲いて、晝間しをれる月夜花

桔 梗

1015/1016

- 淋し花だよ桔梗の花は、盆の佛へ手向け花
 ○萩や桔梗にゃ及びも無いが、きのこさしにも花はさく

蕎麦の花

1017/1022

- ◎暑さ白船源右衛門澤に夏の雪かや蕎麦の花 (白船温泉と金山平の間)
 ○蕎麦の花咲く新切畑、蕎麦にまじりて咲く野菊
 ○お月や落ちても鷹狩山の裾は明るい蕎麦の花
 ○月の無い夜もあかりは要らぬ、道の両側蕎麦の花
 ○蕎麦の花咲きゃ鳴くきりぎりす、月の落ちたも知らず鳴く
 ○九月半ばに雪かと思や、あれは松川蕎麦の花

紅 葉

1023/1025

- 戀かあらぬか秋山見れば、漆はずかし櫃 (はじ) もみぢ
 ○峯の紅葉朝日がさして、中に常盤の松の色
 ○末は紅葉の錦を着るも、今は若葉のうす緑

十七 木 石

草 木

1026/1033

- 春の風吹きゃ山さへ笑ふに、思案投げ首出るわらび
 ○蒔いた種なら生えるもよいが、蒔かぬだべ草めた生える
 ○君に見せたやあの澤ばたで、化粧柳の水かがみ
 ○馬羅尾の山奥笹竹刈りて、かごに拵らへ蠶飼い
 ◎お月招いた薄も今は、世事にくすぶる炭俵
 ○風に吹かれてばらゝ落ちて、澤へ流れる山の栗
 ○わたしゃ奥山谷間の雑木、花も咲かずに落葉する
 ○炭に焼かれりゃあの白樺も、只の雑木で賣られ行く

岩 石

1034/1035

- 春の日永に安曇野通りや、みかげ石を切る鑿の音
 ○音もカチゝゝ石屋がたゝく、此虚は葦間の川のへり

十八 動 物

雉 鶯

1036/1041

- ◎何がつらいぞ今日この頃の、笑ふ山端になくきぎす
 ○馬羅尾の鶯乾いた喉を、しめす葦間の岩清水
 ○馬羅尾の鶯わが身は痩せて、雛の餌さをば衛 (ぜ) へまはる
 ○優しこえて鳴く鶯は、人の厭やがる藪傳ひ
 ○山の鶯里へ出て啼けよ、山ちゃ聴き手は更に無い
 ◎山の鶯里へ出れば、憎くや雀が悋気をする

雲 雀

1042/1047

- わらび取りゝゝ牧原行けば、柴のかげから立つ雲雀

○檜や穂高を吾が物顔に、唄う雲井の揚げ雲雀
○雲雀揚るよ有明山の、峯の高さと同じほど
◎聲はすれども姿は見えぬ、雲の中なる舞子鳥
○雲雀鳴くゝゝ小一里来ても、同じこえて笠の上
◎揚がる雲雀の二上り調子、引いた霞の絃に乗る

燕

1048/1050

○屋根は草葺き柱は丸太、何處がよいとて来た燕
○無事で来たかよ去年の燕、よくも古巢を忘れずに
○秋が来ました又来年と、古巢残して行く燕

杜 鵑

1051/1052

○五月闇夜に絹裂くやうな、ホッチョカケタカほとゝぎす
○鎌を研いでりや三束刈ったか、鳥が来て鳴く木のみねで
「三束刈ったか」「テッペンカケタカ」「ホッチョカケタカ」「弟戀シ」

行ゝ子（こしきり）

1053/1055

○卵取られたあの葎切は、葎のてんびねでなきあかす
○積もる思ひの八千八聲、なくかよしきり夜もすがら
○厭な葎原、夜晝無しに、鳴くよ葎切がしゃゝゝと

水 鷄（くいな）

1056/1058

○八千八聲のよしきりよりも、たまの水鷄が耳に附く
○ぼぼんゝゝと鼓の調べ、月に焦がれるあのくひな
○乳川川邊に巢をくふ水鷄、夜更け淋しや出ては鳴く

鷺 梟 日雀（ひがら）

1059/1063

○穂高森には朝起き鳥、晩にゃ鳴きます五位の鷺
○何が嬉しか此の不景気に、ぼぼんゝゝと鳴くふくろう
○日雀チョチョビン日がら一日（ひんがらひいて）、春の日長の裏山で
○日雀チョチョビンくぜれやくぜれ、人がくぜればもめ（紛議）の因
○日雀四十雀飼ふなぢゃ無いが、妻子養ふのは何うなさる

鳥

1064/1065

◎西の山から鳴いてく鳥、池田たんぼへ田螺堀に
◎鳥鳴くともなな苦にさしと、鳥其の日の役で鳴く
「なに苦にさせそ」を「なな苦にさしと」「な行きそ」を「なゝ行かつと」

獣 類

1066/1069

○踊を見に出た権現様の、森の木の間の栗鼠の孫
○彼の娘蒔いたる畑の蕎麦を、山の兎が喰い荒らす
○雪が積もれば一番俣の、尾根へ兎の罌かける
○烏川奥出て来る熊は、檜や櫻の枝を折る

蛙

1070/1075

○畦ひ出されて張む蛙、安曇平の春を知る
○蒔いた苗代短冊形の、中で蛙が歌を詠む
○歌を詠む気で短冊苗間、こねて歩いた青蛙

○おたまじゃくしに四つ足や出来て、ぬるめ這ひ出す天気雨

○蛙げこゝゝ浮かれて騒ぐ、田螺や何時でも沈み勝ち

○蛙なくゝゝお月に焦がれ、のどの袋の裂けるほど

尺蠖 (せきかく) —————

1076

○虫の中でも尺取り虫は、憎い虫だよ丈を取る

蝉 —————

1077/1079

○土を這い出たかたびら蝉が、衣更へして夏のうた

○今年や豊年みんゝゝ蝉が、土用以前に来て鳴いた

○松の木かげに青草敷いて、寝れば来て鳴く油蝉

蚩 —————

1080/1083

○葦原やち原葦原續き、夏はおいでよ蚩狩り

○じくやあはらは蚩の名所、蚩取り行きゃ田に落ちる

○蚩取り行きゃどんぶらに落ちる、落ちて這上りゃ又落ちる

○乳川川ばた生えたる葦に、風が渡れば立つ蚩

機織虫 きりぎりす 鈴虫 魚類 —————

1084/1091

○お月や照るゝゝ権現様の、森のはたをりゃ夜もすがら

○野菊手折ればあの草むらで、音をば止めたるきりぎりす

●豆の葉裏で鳴くきりぎりす、うらみゝゝでなきあかす

●口の憎くさよあのきりぎりす、思い切れゝゝ切れと鳴く

○誰か行かぬか神戸の原へ、鈴虫や神戸の原で鳴く

○犀川鯀は頭がでかい、高瀬鮪 (はや) の子目がでかい

○乳川へにやくにゃ彼の曲がり目で、雑魚が毎日鉢合わせ

○目高取る子の背中を見れば、蟹の背中にさも似たり

十九 野 遊 び

草 摘 み —————

1092/1097

○見れば谷間の露ぼこさへも、頭もちゃげて春を待つ

○石の地蔵に羽織を着せて、娘草摘む栗尾道

○俺らが踊の真似するのやら、土手に並んで出た土筆

○安曇平は住みよい所、野邊の草さへ餅になる

○みんな行きましょ木戸中揃ふて、高瀬川原へちちこ摘み

○ちちこ摘んだる高瀬の川原、今じゃ青田で蛙鳴く

花 見 —————

1098/1102

○土手をのぼりてやれ一休み、花の権現芝の原

○宮の森かげまだ雪やあるに、表大門花ざかり

○五日六日は花見の盛り、七日過ぎれば葉と變る

○岩をかたどりお爛場拵せて、座敷や千畳敷青天井

○花は散るゝゝ踊は續く、續く踊に花吹雪

蕨 —————

1103/1110

○蝶を呼ぶよな力も無くて、思案投げ首出たわらび

○への字形した山端を見れば、のしと書いたるたるあの蕨

- 出れば取られる早蕨さえも、のしと書くとはしほらしや
- 雨で萌え出た端山のわらび、早く行かなきゃ葉と變はる
- 蕨採りには行きたいけれど、乳呑み抱へて行かりゃせぬ
- 紺の風呂敷横ちょに背負ふて、行くよ牧原わらび狩り
- 馬羅尾の横山俎箸（まなばし・大きな）わらび、取に行きましょ農休みに
- 娘十二三わらびは取らで、燃ゆる躑躅を折りかざす

獨活 筍 ————— 1111/1113

- 谷の底にはまだ雪は有るに、尾根でうど掘る崩岳（烏川の奥）
- 誰か行かぬか武石の山へ、うどやわらびの芽を摘みに
- 取りに行かぬか崩の奥へ、五月あがりに竹の子を

岩 魚 ————— 1114/1115

- 田植すませりゃ釣竿肩に、葦間入りへと岩魚釣り
- 見える岩魚が見えてて釣れぬ、石を投げ込みかへる淵（馬羅尾の奥）

きのこ こんまら 鈴虫 ————— 1116/1120

- 雨も降らぬに傘さして、高瀬川原に出たきのこ
- 縄でさがりて取る岩茸の、下は此の世の地獄谷
- 秋はこんまら紫色の、露でむぐ子の手が染まる
- 揃ふたお十七腰びく附けて、こんまらはんじき取りに行く（秋の灌木の實・甘酸い）
- 茅萱押分け鈴虫捕りは、萱の葉うらで手が切れる

二十 踊

踊り場 ————— 1121/1131

- 踊を踊るなら乳川のはたで、淵の岩魚も出て踊る
- 乳川渡れば櫻の並樹、奥にまします踊り神
- 踊り行きましょ神戸のお宮、広い芝生に散る櫻
- 別に名も無い芝原なれど、夏は踊で芝切れる
- 力自まんのばんもち原へ、踊自まんが押してきた（力技かばんもち）
- つくれ（家畜の寮治のこと）しる原踊に取られ、見れば伯樂（獣医）仲間入り
- 上の段から皆様ごらん、踊や下段の芝の原
- 踊りましようかえ好い芝原だ、芝がまん丸く切れるほど
- 芝の切れるは其りゃ好いけれど、借りた着物の裾切れる
- 借りの有るとこ別道を廻り、早く踊り場へ来ればよい
- 踊り行くとて近道をかけて、木中原（常盤村）にて目を突いた

————— 1132/1136

- 野暮れ山暮れ月夜となれば、辻に踊の輪が出来る
- さァさ踊れや踊り子が揃ふた、お月様さへ待ちかねる
- 此宵此の家の廣庭借りて、八重に踊の輪を作る
- 踊を踊るならきりゝとしゃんと、此宵は道筋人が見る
- 神代からなる踊りの姿、残る安曇の夏の宵

踊り始め ————— 1137/1141

- みんな寄って来い業平小町、わたしゃ下手でも音頭取る

- 下手なわしでも出しますからにゃ、返しや皆様どんと出せ
- 安曇八月村から村へ、踊る輪の数唄の数
- 安曇踊とダリアの花は、末は大きく輪に開く
- 安曇踊は高根の花に、蝶々焦がれて舞ふ如く

1142/1146

- お主や何うした顔色青葉、少し踊れよ櫻色
- 踊り度いけど畦道を来たら、裾が濡れてゝ踊れない
- 踊や踊りたし手拭や古し、お月や雲間へは入りゃよい
- 見手の多さよ踊り手の無さよ、見手と踊り手と代わりゃよい
- 誰も踊らにゃおら三人で、四角三角蕎麦の形（なり）

踊らぬ人

1147/1151

- 此宵踊らにゃ娘はやらぬ、小豆焼餅やなほやらぬ
- ◎踊を見て居て踊らぬものは、足がてんぼか手がちんば
- ◎踊を踊る時踊らで置いて、あとでくやむな年を取りて
- ◎いくら見てゝも踊らぬものは、速く小便まって寝るがよい
- いくらしゃれても（容態振っても）踊らぬ人は、ぼろの案山子と同じこと

1152/1156

- 夏は夜短か、お十七様よ、早く踊らにゃ夜が明ける
- 踊を踊らにゃ振袖着ても、長い袂が無駄になる
- 親が著せたるあの振袖で、此宵踊らにゃ不孝者
- 色の白いは七難かくす、踊りはじめは顔かくす
- 赤いたすきをきりゝとしゃんと、踊り上手の目しるしに

飛入り

1157/1161

- ◎他村若い衆よく来て呉れた、裾が濡れつら草の露
- お名は知らねど見たよな御方、去年踊の輪の中で
- 頭禿げよが腰や曲らうが、生きて居るうちや踊りたい
- 主さよく来た踊の中へ、唄で知らせる胸の中
- 踊る輪の中がま口を落し、拾うつもりで目を廻す

1162/1167

- 人におくれて俺ら輪の中へ、唄の挨拶忘れたか
- 言葉かければ踊がだれる、唄で述べますご挨拶
- 入れてお呉れよ踊の中へ、蠶飼ふ間に来たわたし
- せまくなる程見るとこ取られ、踊る人数がふえて来た
- 日傘かしげて通りし娘、夜は踊の輪にまじる
- 瑠璃の玉よりまぶしい方が、おらが踊の中に居る

踊の姿

1168/1177

- 田植ぬのこに田の草裕、踊るお盆にゃ単衣（ひとへもの）
- 印ばんでん半もゝ引で、晝は働き夜は踊る
- 踊る若い衆はまだ木の林檎、赤い顔して頬冠り（林檎も木に在る時は頬冠り）
- かぶる手拭顔三角に、出して踊の輪にまじる

- ◎かぶり揃へた白手拭は、藪に尾花の出たごとく
- 向ふ鉢巻片はだぬぎで、踊る手先に月を招く
- 踊る最中ほっこ（ほっかむり）が取れて、禿げた頭をカキクケコ
- 踊師匠様べにおしろいよ、安曇踊ちゃ髭だらけ
- 羽織袴で踊るは誰だ、あれは俺の方の村長さま
- つづればろでも彼の子が踊りや、ぼろも錦のあやと見る

音頭取

1178/1184

- 晝は田に出て田の草取るが、夜は踊の音頭取る
- ◎音頭取ります聲張り上げて、村の隅々響くほど
- 踊や大輪で音頭は一人、返しや頼むぞ皆の衆
- 安曇踊の其中房で、聲も高瀬の音頭取り
- あやを飾りし文句の上で、鈴をころばす音頭取
- 安曇踊は大きな踊、山で木玉が返し唄
- 踊る娘にお髯がまじる、しかもお髯が音頭取

1185/1188

- お月や照るゝゝ音頭は續く、揃う手拍子足拍子
- あとの文句はおまかせ申す、誰か頼むぞ音頭取
- ◎わしが音頭を取るのぢや無いが、先のお方の息をつなぐ
- ◎先のお方は名題の音頭、鈴の音がしたりんゝゝと

唄

1189/1194

- ◎唄へゝゝと唄せめられて、唄は出ませぬ汗が出る
- 唄は白菊ただもちゝゝと顔にもみぢ葉目にしぐれ
- ◎唄を出すなら續けてお出し、唄の切れ間は聞きにくい
- ◎わたしゃ唄好き唄はにやならぬ、唄で此の身が果てるとも
- ◎唄ひなされよお唄ひなされ、唄で御きりやうが下がりやせぬ
- ◎聲が涸れたら黒豆、石菖、石菖こえ立つ身の薬

月明

1195/1199

- ◎お月やちよろり出て山の腰照らす、娘繻子の帯腰を照らす
- 禿げた頭も踊りにまじりや、月が籠して光らせる
- お月様さへはだしで逃げる、踊上手の禿頭
- 雲の間へ笑顔を出して、月も踊を見て通る

踊半ば

1200/1215

- ◎揃ふたゝゝよ踊子が揃ふた、稲の出穂よりまだ揃ふた
- ◎稲の出穂には出むらもあるが、揃ふた踊にやむらが無い
- 晝は田の草夜は踊り子と、御苦労様だよ若い衆は
- ◎踊をこはすな小若衆よ、娘夜遊や盆ばかり
- 踊を習ふて麥踏みしたら、麥が五斗ばか餘計取れた
- 踊を習ふたら今年の秋は、稲を刈るにも足や軽い
- 踊を踊るよに皆気が揃ふや、山も崩せば海も乾す
- 踊を踊れやどりゃ踊れ、をどる手足にや蚊はさゝぬ

- をどる事なら三度の食を、四度にされても厭とやせぬ (二度でなく呆けて四度が唄の良さ)
- 昔や踊れば飛ぶ鳥や落ちた、今ぢや薬 薬罐 (やかん) に湯気が立つ
- 俺が踊に惚れないものは、木佛金佛石佛
- 松川名物踊か蕎麦か、主のそばにて踊りたい
- 心行くまで踊れや唄へ、月もかげるな日も出るな
- 踊りましょかえ踊らせましょか、月が山かげは入るまで
- 君と踊るか有明月の、うすくなるまで消ゆるまで
- 他村若い衆お名残り惜しや、ならば止めたいあの電車

踊さびれる ————— 1216/1221

- 踊やさびれるペガサス、スクエア、空の中ほど越しかゝる
- 踊や續いて疲れた筈だ、天の川原が西東
- 月は傾く踊は更ける、袖は夜露で重くなる
- おくとびれならうち行っておよれ (寝よ) 天の川さへ横になる
- 踊やさびれる頼よりのお月や、西の山端にかゝる月
- 踊り半ばと思ふて居たに、お月や落ら行く岳の峯

踊仕舞 ————— 1222/1228

- 踊たいのは山々なれど、更けて帰ればしかられる
- 踊や續くに東が白む、高根 (大町の西方) あたりか鶏のこえ
- 踊り過ぎたか早や鶏や鳴いた、見れば夜露に濡れた袖
- まめで達者で又来年も、踊りますぞえ此の庭で
- 踊りつかれて夜更けて歸る、道に稲妻草の露
- 踊すませて来て寝たけれど、耳に音頭がまだ残る
- 日本アルプス夜はほのぼのと、明けて踊の輪が消える

終わりに：

安曇節歌詞は古来の安曇盆唄より採用せらるもの他は全部安曇節及び踊創業以来の出詠で、一部は家元自身の苦吟になるもの、他郷土各地の人々の傑作を集成せしもの

国会図書館デジタルコレクションされたものを藤井明がワードに写した。